

保団連第 49 回定期大会 発言通告用紙

協会・医会名 千葉県保険医協会	氏 名 細山 公子
口頭発言	
発言テーマ	保団連としてHPVワクチンの普及の取り組みを
<p>発言内容</p> <p>千葉協会は、「ワクチンで防げる病気はワクチンで防ごう」の考えのもと、HPV ワクチンの積極的勧奨再開に向けて取り組んできました。12 月 1 日には、千葉県婦人科学会、県小児科学会、千葉市教育委員会の後援のもと、実行委員会形式で市民公開講座を成功させてきました。</p> <p>ただ、HPV ワクチンの実施が広がらない理由の中に、HPV ワクチン接種後の副反応をどうとらえ、どう手立てをとっていくかという点について、実施する医師の側にも躊躇があることがあると感じてきました。私自身も、毎年 1 万人がり患し、3000 人が亡くなるという子宮頸がんの減少のため HPV ワクチンを広めたいと願う一方で、でも、HPV ワクチンが広く再開されれば、それがワクチンに由来するのかどうかはともかく、今までの経験では、副反応は 1 万人に 1 人の割合で出るだろう、それにどう対処したらいいのだろうと考えていました。また、今も残っているだろう接種後の副反応で苦しんでいる人たちを切り捨ててはいけないという思いも強くありました。</p> <p>保団連が 11 月 24 日に開いたシンポジウムで元 JR 総合病院の奥山先生が発表された内容は、「原因が何かより、そこにそういう症状で苦しんでいる子がいる」ということに向き合い、「いろいろ検査をしても悪いところがなかったのだから、時間はかかっても絶対治るよ。」と話して、子どもに寄り添いながら認知行動療法をしていくもので、とても共感できました。また、奥山先生の講演内容で、実際には副反応があった時に受け皿となっている各地の専門医の実情は小児科医が少なく、この年齢の子どもたちを受け止めて治療をするには必ずしも望ましいものとなっていないこともわかりました。受け皿に小児科専門医をという要望を出していくことも、これから必要と思われました。</p> <p>一方で、この予防接種の副反応を減らすためには、接種を受ける本人が予防接種の必要性を理解し、自分の意思で予防接種を受けると決めることは、とても大きな要素だろうと感じました。</p> <p>千葉協会の女性医師・歯科医師の会（りぼんの会）では、性教育と結んで主体的に HPV ワクチンを接種することの大切さを講演されている埼玉の高橋先生を呼んで、講演会を持つ計画を立てました。そしてその講演会を、できれば対象を中学生・高校生本人とその親、そして養護教諭に広げての講演会にできないか方策を模索中です。</p> <p>ワクチンで防げる病気はワクチンで防ぐために、HPV ワクチンの必要性を理解できるよう広く情報提供を行い、接種する人を増やしていくとともに、万一の副反応の発生時も、各地の受け皿に子どもの背景のわかる小児科専門医も配置し充実していくよう要望すること、また私たち医師は、その症例を専門家に任せにするのではなく、かかりつけ医として寄り添い続けること、そういう方向を確認しつつ、保団連として今後 HPV ワクチンの普及に取り組むことを求めます。</p>	